

江戸語における「へ」格・「に」格

『浮世風呂』の登場人物別使用傾向

奥村彰悟

キーワード：へ格、に格、浮世風呂、江戸語

要 旨

現代日本語では「学校へ行く」「学校に行く」のように、「へ」格と「に」格は方向・場所を表す格助詞として用いられる。本稿では、江戸語における「へ」格と「に」格の用いられ方を検討するため、『浮世風呂』を資料として、『浮世風呂』の登場人物を言葉遣いの丁寧度による5つのグループに分けて「へ」格と「に」格の使用差について調査をした。

その結果、全体的には、「へ」格が「に」格よりも優勢であった。さらに、丁寧な言葉遣いをするグループの登場人物が、「お方々へおつしやりおかれまして」のような人物を表す名詞を受ける「へ」格も用いていた。このことは、全体的には、言葉遣いの丁寧度によって「へ」格と「に」格との使用に差が見られなかったのに対して、人物を表す名詞を受ける場合には「へ」格と「に」格に差があったことを示している。

一 はじめに

現代日本語では、「へ」格は方向・場所を表す場合に、例1のように用いられる。しかし、同じ「学校」でも例2のように、「学校に行く」を用いる場合もある。

1 学校へ行く

2 学校に行く

この「へ」格と「に」格を、日本語史的観点から捉えていくと、青木(一九五六)でも触れられているように、中古以降、徐々に「へ」格の領域が拡がり、中世以降になると、「へ」格は「に」格よりも勢力が拡大していることが知られている注1。

このような「へ」格について、近代の状況は原口(一九六九b)、矢澤 橋本(一九九八)並びに矢澤(一九九八)において調査がなされている。原口(一九六九b)では、多くの近代の文章を用いた調査がなされている。その調査は詳細ではあるが、結論として、「へ」格と、「に」格の混同は、文体(作家の個人差も含む)にかか

わる場合が多いとしている。また、矢澤（一九九八）では明治から現代の小説を用いて調査をしており、明治期に関しては、ほぼ原口（一九六九b）と同様の結論を得ている。さらに、矢澤（一九九八）において、明治から現代になるにつれて「へ」格の使用頻度が低くなっていることも指摘されている。これら先行研究の指摘から、中古から中世末期にかけて「へ」格の領域は拡がっていくが、現代になると、「へ」格に代わり、再び「に」格が進出していると考えられる。

一方、江戸語における「へ」格と「に」格に関しては、湯沢（一九五四）などで概観されているものの、詳細な調査はなされていない^{注2}。ただし、青木（一九五六）などの指摘から、近世期である江戸語では、「へ」格が「に」格よりも優勢であったことは明らかであろう。そこで、本稿では、江戸語の資料において「へ」格「に」格を中心に、方向・場所を表す格助詞がどのように用いられていたかについて調査し、江戸語における方向・場所を表す格助詞について考察する。

二 本稿における調査対象と全体的傾向

本稿では、江戸語の資料として『浮世風呂』^{注3}を用いた。『浮世風呂』にみられる言語表現は、必ずしも19世紀初めの話言葉を実に表しているとは限らないが、数々の先行研究で指摘されているように、当時の他の資料に比べて優っているものである。

調査対象は、『浮世風呂』の登場人物すべてとした。このため、

江戸語使用者に限らず、上方者である「かみがた」「かみがた女」「けち兵衛」、江戸者ではあるが上方訛の「太夫」「住吉」、田舎者である「三助」「山だし下女」、西国者である「さいごく」の用例もすべて調査対象としている。また、当時の話し言葉を調査対象とするために、会話文のみを調査した。

また、調査・考察対象となる用例は、「へ」格、「に」格、「さ」格、無格である^{注4}。ただし、「へ」格はすべて調査・考察対象としているものの、「に」格、「さ」格、無格は、「へ」格と文法的に交替可能と判断される場合の用例のみ考察対象としている。具体的には、「に」格の場合には、方向・場所を表す場合の他にも、使役、変化、受け身、動作の目的などを表す場合があるものの、これらは、「へ」格では表すことができないので調査対象外とされる。さらに、「に」格の場合には場所を表す場合であっても、例3のように存在を表す場合がある。

3 「モウくくくく内に居ると、あなた、どう遊ばせ、斯遊ばせで、おそれぬかせるのう」（おべかどん↓お丸どん）

このような、存在の「に」格^{注5}も調査対象外とした。このほか、「を」格の省略と思われる無格^{注6}や、「を」格の機能を持つ「さ」格^{注7}も調査対象外とした。

この結果、『浮世風呂』の会話文における方向・場所を表す格助詞の用例数は、表1の通りである。

この結果から、『浮世風呂』の会話文においては、「へ」格が、

表 1

| へ格 | に格 | さ格 | 無格 |
|-----|----|----|----|
| 329 | 97 | 1 | 5 |

他の格に比べて優勢であること、「へ」格と「に」格との比率は、ほぼ三…一であること、「さ」格、無格はほとんど見られないことが分かる。この結果は、青木(一九五六)以降、先行研究によって指摘されてきたように、江戸語においても「へ」格が「に」格よりも優勢であったことを裏付けるものである。さらに、矢澤(一九九八)でも指摘されているように、夏目漱石の「坊っちゃん」では、「へ」格が「に」格よりもかなり優勢である^注。このことから、江戸語における「へ」格、「に」格の勢力関係に関しては、江戸時代の前後の時代と大きくかけ離れたものではないということが、先行研究の調査結果と重ね合わせてわかる。また、「さ」格や無格が、「へ」格「に」格に比べてきわめて少ないことから、「さ」格、無格の存在が、「へ」格「に」格の勢力に与えた影響はほとんどないといつてよい。

なお、『浮世風呂』に見られた無格は以下の5例である。ただし、無格の用例は、すべて「内イ帰へる」「うちイけへる」「川岸往て見ると」「ルビには」「かしいいつて」となっている。「あつちイ倚りやア」「先イ出やアがれ」のように、長音化していることを表すような表記となっていない。このため、厳密な意味での無格ではなく、「へ」格が融合した形態であると見なすことも可能である。

- 4 「おいらア内イ[↓]帰へる」(子供[↓]歌)
5 「おいらアうちイ[↓]けへる」(子供[↓]歌)

6 「きのふ天津のなまりを売たら、方々[↓]で持来いといふから、川岸[↓]往て見るとお陀仏ス」(八百屋[↓]伝)

7 「あつちイ[↓]倚りやア、新内と豊後のはねが[↓]かゝるシ、こつちへ除きやア、謡だか浄瑠璃だか、脳天から雫を浴しやアがつた」(中六[↓]うたをうたふ人)

8 「ヤイ、新内の麦こがし野郎から先イ[↓]出やアがれ」(中六[↓]うたをうたふ人)

このうち、例4・5は、子供達が歌を歌っている場面である。例7・8は風呂場でお湯をかけられた中六がまわりの人々に対して怒っている場面である。このように、無格が用いられている場面としては、怒っているときの会話、歌と、特に限られたものであることが分かる。また、例6は、八百屋が仲間の魚屋と話している場面で、普通の会話の場面であるが、例6の八百屋は、けち兵衛との商売のやり取りの際にも、かなり荒い言葉遣いをしていいる。このことは、地の文に次のようなことが書かれていることから分かる。

9 「江戸者の商人は言するどく、上方者の買手は言やさしく聴ゆるゆゑ、物陰より立聴けば、売手と買手と取違さうなり」(四編巻之中)

この八百屋の例と、例7・8の中六の例から、無格は言葉遣いが荒くなる場合に用いられているということがうかがえる。た

だ、例7の文中にも「へ」格が用いられていることから、言葉遣いが荒くなれば、必ず、無格になるということではない。いずれにせよ、無格はぞんざいな言葉遣いをする人物の間で用いられていたことがうかがえるのである。

また、田舎者が「さ」格よりも「へ」格を多く用いていることにも注意を要する。田舎者が「さ」格を用いているのは次の1例のみであった。

10 「何がはや、今度観物の太夫どのた云て、四角イ箱さ入て、開帳場の大金もうけべいと思つて」（三助↓風呂場の人々）

これに対して、田舎者が「へ」格、「に」格を用いている例は以下の5例である

11 「其廿両さ村内へ割付て、濁酒だアの、居びたり餅だアの、あんでもハア、三日正月で祝ツけエ」（三助↓人々）

12 「わたしは又江戸といふ所は湯へさへ這入れば唄ふものかと思ひました」（山だし下女↓風呂場の人）

13 「おやれ嬉しや大坂へ着た」（山だし下女↓歌）

14 「こゝろざしよと道芝さまへ」（山だし下女↓歌）

15 「宿はどこだと手代衆にきけば、宿は加賀屋の八郎兵衛さまよ」（山だし下女↓歌）

このうち、例13・14・15は歌なので、田舎者が田舎の言葉と

して「へ」格、「に」格を用いたとはいえない。しかし、例11・12では田舎者が「へ」格を用いている。ロドリゲス『日本大文典』の記述にある「京へ筑紫に坂東さ」の通りであれば、田舎者は「さ」格を用いていたであろうし、『浮世風呂』の作品の中で、田舎者であるということ強調するためには、田舎者の発話には「へ」格よりも、「さ」格を用いた方がいいであろう。それにも拘わらず、『浮世風呂』の作品中で、田舎者が「へ」格を用いているのは、田舎者が江戸者と会話している場面であるため、田舎者が江戸者に合わせて「へ」格を用いていたとも考えられる。

このように、無格、「さ」格は、特定の場面や特定の人物の間で用いられていたことがわかる。しかも、その用例数は「へ」格、「に」格に対してきわめて少ない。このように『浮世風呂』においては、ぞんざいな言葉遣いをする人物の間で無格が用いられることがあったこと、田舎者が「さ」格を用いることがあったということを確認できるにすぎない。このため「へ」格、「に」格の使用差に与えた影響は少ないと見なすことができる。そこで、以下では、江戸語における「へ」格、「に」格の使用差について考察していく。特に、登場人物による使用差を中心に検討を加えていくことにする。

三 人物グループによる方向・場所を表す格助詞

三・一 人物のグループ分けについて

原口(一九六九b)によると、近代における「へ」格と「に」格

の使用差は、作家の個人差、または文体差によるという。ならば、江戸語においても文体によって「へ」格と「に」格に使用差が見られるであろうか。そこで、『浮世風呂』の登場人物における「へ」格と「に」格の使用差について調べてみることにする。ただ、個人によって用例数が差が見られる。(例えば「へ」格では最も用例数が多かったのが「生酔」の17例であるが、1例のみの人物も多く見られた。)このため、『浮世風呂』の登場人物をグループに分けることにした。本稿におけるグループ分けでは、性別と言葉の丁寧度によって分けることにした。

江戸語において、言葉遣いが丁寧であるかどうかについては、敬語、および連母音 ai の長音化によって、ある程度分類ができる。このうち、敬語の場合は、どの敬語を用いるかによって、その敬語の度合いに差を付けることはできるが、どの程度敬語を用いるのかによって登場人物の階層・グループ分けをすることは難しい。なぜなら、仮に登場人物を上層・中層・下層の三段階に分けようとしても、中層と下層は、上層に対して同じ敬語を使うからである。こうなると、中層と下層との区別が付きにくくなる。このため、敬語の場合は、言葉遣いが丁寧であることと、それに伴う話し手と聞き手との人間関係については、ある程度明らかにできるが、それは、相対的な基準に過ぎず、絶対的な基準による人物のグループ分けはできない。

一方、連母音 ai の長音化によっても言葉遣いの丁寧さを判断することができる。連母音 ai の長音化とは、江戸語における特徴の一つで、例えば「ない」が「ねー」になるような、連母音 ai が e:

となる現象である。特に発話人物の階層が低い場合、発話の丁寧度が低い場合には ai が e: になりやすい。このような、連母音 ai の長音化率については、ai が長音化するかどうかによるものであるため、丁寧な言葉遣いなのか、ぞんざいな言葉遣いなのかのどちらか一方であり、敬語のように、丁寧度に段階があるわけではない。そのため、登場人物がどの程度 ai の長音化率を持つのかによって、登場人物そのものの階層・グループ分けをある程度推測することは可能である。

この連母音 ai の長音化率と登場人物との階層に関連があることは、小松(一九八二)、中田(一九八五)が、具体的な数値によってある程度明らかにしている。小松(一九八二)では、上方者や西国者を除くすべての登場人物における連母音 ai の長音化率を調べ、それと、登場人物の階層との関係を考察している。結果としては、ほぼ一致するものの、一例のみの場合も含めているため、用例数の少ない、つまり、発話回数の少ない登場人物の場合には、階層が低くても ai を用いている例が見られ、必ずしも厳密ではない。例えば、使用人から主人への発話のように、階層の低い人物から階層の高い人物への発話の際には、連母音 ai は長音化しないであろう。この点に注目したのが中田(一九八五)である。中田(一九八五)では話し手だけでなく、聞き手との関係にも注目している。しかも、三例以上の場合のみ扱っているため、小松(一九八二)とは異なり偶然の例を排除している。

これらとは違った視点で『浮世風呂』の登場人物をグループ分けしたのは、福島(一九九九)である。福島(一九九九)は社会言語

学的立場による言語変化の観点から『浮世風呂』の登場人物をグループ分けしている。このため、結果として、階層の低い登場人物であっても丁寧な言葉遣いをしているグループに含まれていることがある。このことにより、従来のような階層による分類では、例外的としてきた例も、例外ではなくなる。この点、福島（一九九九）によるグループ分けは、言葉遣いの丁寧さと「へ」格と「に」格との関係に言及する本稿においても有効である。

ただ、福島（一九九九）は、言語変化の様子を明らかにするために、グループ分けをしたのであって、グループによって使用差を明らかにすることを目標としていないため、どの登場人物がどのグループに含まれるのかを全てにおいて一々説明しているわけではない。そこで、本稿では福島（一九九九）のグループ分けを基本にして、どのグループに所属するのか不明な人物に関しては、小松（一九八二）を参考にしながら、大まかに以下の五分類を行った。¹⁰

グループ1 男… 医者、隠居、柿のいち、栗のいち、徳松、俳偕

亭歌詠、俳助、晩右衛門、福助、袖のいち

女… いぬ、おさめ、おたい、お初、かも子、きち、

けり子、ひとがらよきかみさま、やす、よめ、

六十ちかきばあさま

グループ2 男… 後兵衛、甘次、鬼角、先蔵、でつち、徳蔵、二

階番頭、松右衛門、めくいち、物もらい、やみ

吉、湯くみ男

女… あき、おいか、おたこ、お馬、辰、初

グループ3 男… 衰微、点兵衛、直兵衛、生酔、八兵衛、番頭、

古左衛門

女… おいへ、お角、おかべ、おさみ、おてば、おと

な、おまる、小弦、三十四五のかみさま、巳、

はる、ゆびさきあらふかみさま、娘

グループ4 男… あば民、亀、吉、肝右衛門、金、金兵衛、子供

たち、鼓八、幸、猿田彦、せはやきちいさま、

中六、とび八、二十二三の男、人々、湯くみの

男、又、むだ助

女… おかこ、おかさ、お川、同年ぐらひばあさま、

おはね、お山、五十余のかかさま、西光、三十

四五のうば、豊猫、とり、婆文字、冬、六十ち

かきばあさま

グループ5 男… いさみ、源、鉄砲作、伝、苦九郎、はたちあま

りの男、ぶた七、八百屋

女… おさる、おばち、おべか、おべかどん、お丸どん、

女、かかとをあらふばあさま、さる、した、山

このグループは、グループ1からグループ5につれて、言葉遣いがぞんざいになる集まりである。例えば、グループ1は丁寧な言葉遣いをする登場人物の集まり、グループ5はぞんざいな言葉遣いをする人物の集まりといえる。

このほか、江戸語使用者以外で、方向・場所の格助詞を用いる登場人物は以下の通りである。

格は、グループ1に偏って見られる。これに対して、グループ2～5では、人物を表す名詞を受ける場合に「へ」格よりも「に」格の方が勢力が強かった。このことから、人物を表す名詞を受ける「へ」格は、グループによって使用に差が見られるのではないかと考えられる。

人物を表す名詞を受ける「へ」格、「に」格に関しては、江戸語を調査対象としたものではないが、黒星(一九九七)、白井(一九九七)によって人物を表す名詞を受ける「へ」格と「に」格の考察がなされている。黒星(一九九七)では、大蔵虎明本狂言集および、近松浄瑠璃を資料として用い、白井(一九九七)では、キリシタン文献を資料としているが、それらによると、大蔵虎明本狂言集、近松浄瑠璃、キリシタン文献のいずれも、「へ」格と「に」格が人物を表す名詞を受ける場合には、「へ」格の方が待遇が高いときと指摘されている。本稿における『浮世風呂』の調査でも、表2～6で示したように、丁寧な言葉遣いをする人物のグループに、人物を表す名詞を受ける「へ」格が多く見られる。

そこで、次節では、人物を表す名詞を受ける場合を中心に、「へ」格と「に」格について検討していくことにする。

四 人物を表す名詞を受ける「へ」格と「に」格

四・一 方向・場所を表す名詞を受ける場合

まず、人物以外の方向・場所を表す名詞を受ける「へ」格と「に」格について検討してみる。

16 (グループ1)「チヨイト井戸へ行けば、銭いらす釣瓶からのめます」(晩右衛門↓とび八・鉄炮作・猿田彦ら)

17 (グループ2)「こはだならけふ買て焼て置て、自身にあすの朝さげかごを堤て河岸へ行きます」(松右衛門↓番頭・八兵衛)

18 (グループ3)「湯へ入る時は一人分十文払ふ」(生酔↓番頭)

19 (グループ4)「夫から隣の内へ用が有て行うとする」(とび八↓直兵衛)

20 (グループ5)「鉄砲の隅へかぐんでお念仏でも申て居な」(おさる↓おたほ)

21 (上方者)「これから往だら、わし所へお出て飯食んか」(かみがた↓山)

例16～20のように、人物以外の方向や場所を表す名詞を受ける場合には、グループ1から5のどこに所属する人物であっても、「へ」格を用いている。これは、例21のように、上方者の場合でも同じといえよう。

一方、「に」格も、用例数は少ないものの、人物以外の方向や場所を表す場合にも用いられている。

22 (グループ1)「さすれば仏前にむかつて、鉦をた、き立、

数珠を摺切らうが、すつばいだんぶつおなまめだんぶつの浮虚ては、仏さまも不承知だ」(晩右衛門↓とび八・鉄炮作・

猿田彦ら)

23 (グループ2)「銭も金も一ツ所に集るありがたい所だによつて、諸国の人々が皆出て来て、出世するではないか」(松右衛門↓番頭・八兵衛)

24 (グループ3)「ハ、ア、竹の皮につ、んで、ヤ、コレ、番頭、おのし買たらうが」(生酔↓番頭)

25 (グループ4)「ざつと三里もある道法の所を、山も谷も雪で埋るもんだから、雪車といふ物に乗と、ずるくくくと迂り出して、三里の道を煙草一服の間に飯りやす」(とび八↓直兵衛)

26 (グループ5)「御新造さんの不断挿になさる櫛を下に遣て、三両いくらか打と云たつけが」(おさる↓おべか)

27 (上方者)「それじゃさかい、風呂にたと入て、温めてこまそと思ふて」(かみがた↓山)

例22のようにグループ1に属する人物から、例26のようにグループ5に属する人物まで、幅広く、人物以外の方向や場所を表す場合に「に」格を用いている例が見られる。また例27のように、上方者による例も見られる。

人物以外の方向・場所を表す名詞を受ける場合には、「へ」格の方が「に」格よりも勢力が強いが、「へ」格、「に」格とともにどのグループでも用いられていることがうかがえる。この点で、福島(一九九九)の分類は、前節で見たように「へ」格と「に」格の使用差に反映しているとはいえない。ただし、表2-6で示したように、人物を受ける「へ」格は、グループ1に多く見られる。

このことから、福島(一九九九)の分類は、人物を表す名詞を受ける場合の「へ」格と「に」格の使用差には反映しているとみることができるとができる。

四・二 人物を表す名詞を受ける場合

次に、人物を表す名詞を受ける場合の「へ」格と「に」格の使用について検討してみる。

人物を表す名詞を受ける「へ」格は次のような例である。

28 (グループ1)「ハイ、やはり私の勤申た旦那様へ上りました」(ひとがらよさかみさま↓六十ぢかきばあさま)

29 (グループ1)「お店のお方へおつしやりおかれまして下さりますやうに」(俳助↓やみ吉)

30 (グループ1)「ホンニ私どもへも些とおよこし申なさいまし」(いぬ↓きち)

31 (グループ2)「旦那さんエ。お坊さんをお連申て参じました」(初↓福助)

32 (グループ4)「まかり間違つて爰はといふ時にやア、友子友達へ面づくだ」(肝右衛門↓あば民・中六)

例28・29・30ではグループ1に属する人物(ひとがらよさかみさま・俳助・いぬ)が、例31ではグループ2に属する人物(初)が、人物を表す名詞を受ける「へ」格を用いている。しかも、これらの場面はいずれも、話し手の聞き手に対する丁寧度が高い場面である。

ある。例えば、例28では、ひとがらよきかみさまは六十ちかきばあさまに対して丁寧な言葉遣いをしている。例29の俳助はどの人物に対しても丁寧な言葉遣いをする人物である。また、例31では、グループ2に属する初によって「へ」格が用いられているが、ここでも初は主人(福助)に対して話しかけている場面であるため、話し手の聞き手に対する丁寧度は高い場面であるといえる。ただ、例32の肝右衛門はグループ4に属しているが、例32の場合は、「への」の例であり、「に」格では用いられない。このため、ぞんざいな言葉遣いをするグループの人物であっても、「へ」が使われたのである。

一方、人物を表す名詞を受ける「へ」格に対して、人物を表す名詞を受ける「に」格はグループ1〜5にわたって多く用いられている。

33 (グループ1) 「ヲ、、いたい。盲人に鉢合せするとは明盲め」(栗のいち↓柿のいち)

34 (グループ2) 「ヲヤ、能のだネ、徳さんは能お腹掛をお持ちだネ。初にお呉れ」(初↓徳松)

35 (グループ3) 「イエサ、貸切といふ訳は、店向のお方くゝに戸棚を皆貸てござりますから、お脱なざる場がござりませぬ」(番頭↓生酔)

36 (グループ4) 「番頭がしらずは、今来た先生さんに聴なせへ」(とび八↓直兵衛)

37 (グループ5) 「昨日は相談が出来なんだが、あの人はちや

らッぼこ者だから、御新造さんにきつと売つけるのさ」(おさる↓べか)

38 (上方者) 「ヤ、番頭さん。おまへに頼で置く事があるは」(けち兵衛↓番頭)

例33のようにグループ1の人物(栗のいち)から、例37のように、グループ5に属する人物(おさる)まで、言葉遣いの丁寧度に関わらず幅広く用いられていることがうかがえる。また、例38のように、上方者による「に」格の例も見られる。

さらに詳しく見ると、例33の場合、栗のいちがグループ1に属するが、この場面は、栗のいちが柿のいちといきなりぶつかった場面であるので、話し手の聞き手に対する丁寧度は高くない。また、例34は、初は主人の子供である徳松に話しかけている場面である。ここでは、話し手の聞き手に対する丁寧度は高いとはいえない。このことから、丁寧な言葉遣いをするグループに属する人物であっても、話し手の聞き手に対する丁寧度が低い場合には、「に」格が用いられていたことがうかがえる。

以上のことから、人物を表す名詞を受ける「へ」格と「に」格については、次のようにまとめることができる。丁寧な言葉遣いをするグループ1およびグループ2の登場人物は「に」格だけでなく、「へ」格も用いていた。しかも、「へ」格が用いられているのは、話し手の聞き手に対する丁寧度が高い場合に用いられていた。一方、「に」格は、話し手の聞き手に対する丁寧度に関わらず用いられていた。また、グループ3・4・5では、専ら「に」

格が用いられて、「へ」格の例はなかった。

人物以外の場所や方向を表す名詞を受ける場合には、グループ間における「へ」格と「に」格の使用に、大きな差が見られなかったのに対して、人物を表す名詞を受ける場合には、グループ1およびグループ2の人物が「へ」格と「に」格を用いている。黒屋（二九九七）、白井（一九九七）によると、中世末期には「へ」格が「に」格より待遇が高いとされている。江戸語においては、人物を表す名詞を受ける場合に「へ」格を用いることは、「に」格を用いることよりも、聞き手に対する丁寧度の高さを示すものに変わってきているように見えるが、この点についてはあらためて考へたい。

五 おわりに

以上、『浮世風呂』における、方向・場所の格助詞を、グループ別の登場人物との関連で見えてきた。全体的な傾向としては、『浮世風呂』においては「へ」格の方が「に」格よりも優勢であった。このことは、時代が下るにつれて「に」格の領域に「へ」格が進出してきたという青木（一九五六）など、先行研究の指摘に沿ったものである。

『浮世風呂』における「へ」格と「に」格は、全体的には、言葉遣いの丁寧度によって「へ」格と「に」格の使用に差が見られなかったのに対して、人物を表す名詞を受ける場合には、丁寧な言葉遣いをするグループ1およびグループ2の人物だけが「へ」

格と「に」格の両方を用い、グループ3・4・5の人物は、ほぼ「に」格だけを用いていた。また、人物を表す名詞を受ける「へ」格は、話し手の聞き手に対する丁寧度が高い場合に用いられていたが、人物を表す名詞を受ける「に」格は丁寧度に関わらず用いられていた。

本稿では、『浮世風呂』における登場人物と「へ」格「に」格との関係について検討してきた。『浮世風呂』では、言葉遣いの丁寧さによって、特に人物を表す名詞を受ける「へ」格と「に」格との間に使用差が見られた。他の江戸語の資料や近代の資料においても、人物を表す名詞を受ける「へ」格と「に」格との使用差は、言葉遣いの丁寧さと関係しているのかを検討する必要があるが、このことは別稿に譲る。

注1 青木（一九五六）によると、「へ」は平安中期以前までは、「移動性動作の目標を示し、言語主体の現在地点から遠く離れた地点へ向ってゆく、の意を担ってある」としている。それが、院政期になると「すべての移動性動作の目標」となり、鎌倉初期には移動動作を前提とした「到達点」を示す。鎌倉中期になると「移動性を全くもたぬ動作に対しての目標」をも示し、すべての動作の目標を示すようになる。そして、室町期になると「動作の行はれる場所」を示す用法まで見られる。現代日本語では、青木の述べる、「へ」の本来の機能である「移動性動作の目標を示し、言語主体の現在地点から遠く離れた地点へ向ってゆく、の意」のみが機能しているといえるかもしれない。

注2 近世語における「へ」格に関しては、原口(一九六九a)において調査がなされたものが見られるものの、それは主に近世初頭の九州関係の資料を用いた研究である。原口(一九六九a)では、近世初頭の九州地方では方向を表す助詞に、「に」が用いられることが多いことを明らかにしている。原口(一九六九a)によって、青木(一九五七)が指摘しているように、近世初頭の京都では「へ」格が「に」格よりも優勢であったものの、ロドリゲス『日本大文典』の記述にあるように、「京へ筑紫に坂東さ」とあり、九州地方では「に」格が用いられていたことを確認できる。

また、鶴岡(一九七九)において、江戸語の資料『浮世床』文化十(一八二三年)文化十一(一八一四年)における「へ」格と「に」格に関して「行く」と「来る」に限った調査がなされている。それによると『浮世床』では「行く」「来る」には「へ」格のみが用いられている。

注3 『浮世風呂』(文化六(一八〇九年)文化十(一八一三年))は日本古典文学大系を底本とした。翻刻は限りなく版本に忠実である。ただし、本稿の例では、ルビは全て省いた。

注4 次のように、「へ」格と同じ場所を表す格助詞として、「ま」で「格が見られる」。

「宿下りの外は内へ来るなと申付ましたから、近所までお使に参つても内へは寄ません」(辰↓巳)

この、「まで」格は、『浮世風呂』では4例見られた。しかし、意味格としての「へ」格と「まで」格には大きな違いが見られるため、本稿では考察対象外としておく。

注5 存在の「に」格は、『浮世風呂』では93例見られた(会話文・

ト書き・地の文の合計)。なお、青木(一九五七)によると、天草本平家物語では「動作の行はれる場所」にも「へ」格が用いられているとしている。しかし、このような存在を表す「へ」格の用例はきわめて少ないとしている。また、本稿の筆者による調査では『浮世風呂』には、存在を表す「へ」格が見当たらなかった。あえて挙げるとすれば、次のような微妙な例が存在の「へ」格であるという解釈ができる程度である。

「それで其土地が海へ僅一里ある。どうもはき場がないから自然と安く売る。そこは又お江戸のありがたさには、海へ一里ある所で御覧じろ」(肝右衛門↓中六・あば民)

注6 「を」格の省略と思われるのは次のような例である。

「あつちら^め向ちやアドドドン」(兄↓四十余の男)

注7 「を」格の機能を持つ「さ」格は次のような例である。

「其廿両さ村内へ割付て、濁酒だアの、居びたり餅だアの、あんでもハア、三日正月で祝ツケエ」(三助↓人々)

注8 矢澤(一九九八)、一五ページの表による。

注9 例11の場合は、「へ」格の直前に「を」格の機能を持つ「さ」格がある。「さ」格が重なって用いられることをさけて、田舎者の例でも「へ」格を用いたとも考えられる。

注10 本稿は、福島(一九九九)のような、言語変化の考察ではなく、小松(一九八二)、中田(一九八五)のように、江戸語そのものにおける考察である。このため、福島(一九九九)とは目的が異なるものの、そのグループ分けが、適切であると判断したため、参考にするにことにした。

参考文献

青木伶子(一九五六)「へ」と「に」の消長『国語学』24
 黒星淑子(一九九七)「へ人物へを受ける「へ」について」『語文研究』84 九州大学国語国文学会
 小松寿雄(一九八二)「浮世風呂における連母音アイと階層」『国語と国文学』59・10
 白井 純(一九九七)「キリシタン文献における「に」格と「へ」格——待遇表現の標識について——」『国語国文研究』106 北海道大学国語国文学会
 鶴岡昭夫(一九七九)「近代口語文章における「へ」と「に」の地域差——「行く」と「来る」について——」『中田祝夫博士功績記念国語学論集』弁誠社
 鄭 昌鎬(一九八七)「移動動作の表現における「へ」と「に」の使い分けの法則」『岡大國文論稿』15 岡山大学文学部 国語国文学研究室
 土井忠生訳注(一九五五)、J・ロドリゲス原著(一九〇八)『日本大文典』三省堂
 中田敏夫(一九八五)『浮世風呂』にみる場面変容にともなうことばのきりかえ——連母音aiの融合非融合を資料に——『人文学報』173 (東京都立大学)
 原口 裕(一九六九a)「に」と「へ」の混用——近世初頭九州関係資料の場合——『福田良輔教授退官記念論文集』九州大学文学部国語国文学研究室福田良輔教授退官記念事業会
 原口 裕(一九六九b)「近代の文章に見える助詞「へ」」『北九州

大学文学部紀要』4

福島直恭(一九九九)「連接母音aiの長母音化に関する社会言語学的一考察」『国語学』196
 矢澤真人・橋本修(一九九八)「近代語の語法の変化——『坊ちゃん』の表現を題材に——」『日本語学』17・5 明治書院
 矢澤真人(一九九八)「へ」格と場所「に」格——明治期の「へ」格の使用頻度を中心に——」『文藝言語研究 言語篇』34 筑波大学文芸・言語学系
 湯沢幸吉郎(一九五四)『江戸言葉の研究』明治書院
 湯沢幸吉郎(一九五四)『徳川時代言語の研究』風間書房

(一九九九年七月一日受理)